

夏胡瓜の摘心に関する試験(予報)

橋 口 満 男

福岡県立農業試験場

Hashiguchi, M. Studies on pruning of summer cucumber.

1. 緒 言

所謂夏胡瓜の中地這栽培用品種は側枝に早く且つ多く雌花を着生し易い習性を持つている為、本葉6~7枚で摘心し、後は放任すると云う栽培が一般に行われて来たが、この摘心栽培が果して経済栽培に合理的であるや否や判然としないし、又胡瓜に関する限りに於いては摘心に関する試験も殆んど見当たらない。

然し乍ら九州に於いては、此の中地這用品種の栽培が多く特に夏季端期用蔬菜の一つとして重要な役割を果たしている点から、農家経営上合理的な摘心法確立の必要を感じたので、筆者は昭和25年夏簡単な予備試験を実施した。依つてその結果を茲に報告する。

2. 実験材料及び方法

供試品種は福岡縣に於いて広く栽培せられている宮陣胡瓜を用いた。栽培方法は5尺×3尺とし、肥料は本縣の施肥基準により施した。5月24日に1ヶ所5粒宛播種し發育するに従い間引を行い最後に各1本宛残した。試験区としては次の3区を設けた:

1. 放任区……全く摘心を行わず蔓は自然に伸長せしめる。
2. 慣行区……主枝の本葉6枚残して摘心し、其の後に着生する蔓は放任する。
3. 摘心区……主枝の本葉6枚残して摘心し、其の後に着生する1次側枝、2次側枝等共に雌花の着生を見たならば夫々その先葉2枚残して摘心する。

供試個体数は各試験区共3本宛計9本であつた。発芽後蔓の伸長につれて試験区別に夫々摘心を行った。

調査事項は、雌花の着生節位別の着生数、開花数、収穫果数及び開花日、収穫日とし、収穫果は50匁~60匁程度を標準とした。調査は總て8月23日迄で打切つた。

3. 実験結果

1. 雌花の着生数、雌花の着生数は第1表の如く、

慣行区の平均63花、摘心区25花、放任区23花の順であつた。

これを着生節位別に見ると、放任区では1次側枝に殆どが着生し主枝には僅か3花着くに過ぎない、慣行区では、2次側枝に多く1次及び3次側枝に着生し、摘心区では3次側枝に多く、2次側枝、1側枝が之に次ぎ4次側枝にも若干着生する。

2. 開花数。雌花の着生は各区共可成り多い反面、多くのものは黄色萎凋し脱落するもので開花に至つたものは放任区27花、慣行区45花、摘心区28花で、着生数に対し30%、62%、50%となり、40~70%の花は開花に至らず脱落している。

着生節位別開花状況は、放任区は1次側枝に多く、慣行区、摘心区は共に2次側枝に多い傾向があつた。

3. 結実数。結実に至つたものは摘心区18本、慣行区15本、放任区5本の順で、着花数に対し夫々31.6%、23.8%、21.7%で摘心区が優つている。

着果節位別では、放任区は結実少く大部分が1次側枝に、慣行区では2次側枝に多く、1次、3次側枝にも可成り着果し、摘心区では1次及び2次側枝に多く3次側枝にも若干の結実を見た。

第1表 着生節位別、雌花着生数、開花数及び結実数 (1株平均)

区 別	着生節位	雌花着生数	雌花開花数	結実数	着生雌花数に対する結実数比率 %
放任区	主 枝	3	2	1	—
	1次側枝	19	5	4	—
	2次側枝	1	—	—	—
	3次側枝	—	—	—	—
	4次側枝	—	—	—	—
	計	23	7	5	21.7
慣行区	1次側枝	15	8	3	—
	2次側枝	33	26	8	—
	3次側枝	15	11	4	—
	4次側枝	—	—	—	—
	計	63	45	15	23.8
摘心区	1次側枝	10	8	8	—
	2次側枝	17	12	7	—
	3次側枝	23	7	3	—
	4次側枝	7	1	—	—
	計	57	28	18	31.6

4. 時期別收穫果数. 開花は7月10日に始まり, 收穫始は21日で開花より收穫迄の日数の最短7日, 最長12日で, 1果平均重は放任区57.3匁, 慣行区62.8匁, 摘心区53.8匁で大差はなかつた.

時期別に收穫果数を見ると, 第2表の如く, 7月下旬よりの旬別では, 放任区は全旬を通じて少く, 慣行区が8月下旬まで少数乍ら收穫しているが, 摘心区では8月下旬迄に集中して收穫し得る傾向が認められた.

第2表 時期別收穫果数 (1株平均)

区別	收穫時期 7月21日 ~31日	8月1日 ~10日	8月11日 ~20日	8月21日 ~31日	計
放任区	—	4	1	—	5
慣行区	2	7	2	4	15
摘心区	7	6	5	—	18

4. 考 察

以上の実験結果より考察すれば, 摘心を全く行わない場合の蔓の伸長, 側枝の発生は第1図の様に主枝及び1次側枝の伸長成長が旺盛で, 2次側枝の発生は極めて少く, 且つ1次側枝に着生した雌花も結実までに至る事は極めて稀な傾向が認められた. これは摘心を行わない結果, 主枝及び2~3の1次側枝の伸長旺盛で過度の莖葉繁茂の為, 側枝並に雌花に対する栄養供給が不足し, 側枝の発生, 雌花の着生が少く落花, 落果も多くなるものと思わせられ, 萩原氏の南瓜に関する実験結果と一致する. 従つて収量少く, この点より見て放任栽培は合理的であるとは考えられ難い.

慣行区と摘心区では, 程度の差はあるが一応は摘心を行つたものである. 従来の慣行法では主枝の摘心により1次側枝の発生は促進せられ且つ雌花の着生の多い事が認められ, 杉山氏のシロウリの試験で親蔓の摘心が子蔓の伸長に影響はないと云う結果と相違した.

結実については1次側枝の伸長は放任区に近い旺盛な傾向がみられ, 2次側枝の發育中庸なものに結果する様で, 従つて1回摘心のみでは莖葉の發育が旺盛に過ぎるものと思われる.

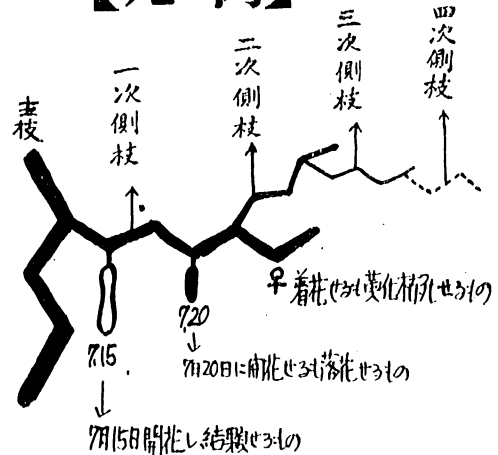
摘心区では, 慣行区の過度の莖葉繁茂を1次側枝の摘心により抑制すると共に, 2次側枝の発生を促進する効果が認められ, 杉山氏がシロウリの試験で, 子蔓の摘心が孫蔓の発生を促進すると云う結果と一致する. 更に, それ以後発生する側枝も同様であり, 莖葉の伸長繁茂と結実及び果の肥大への栄養供給が前2区

の場合の様な不均衡が少く, 結果数が増加するものと考えられる. 然し慣行区と摘心区との間に於ける收穫果数の差は顯著でなく, このことについてのみ考察すれば, 摘心の労力と関連しその優劣は認め難い.

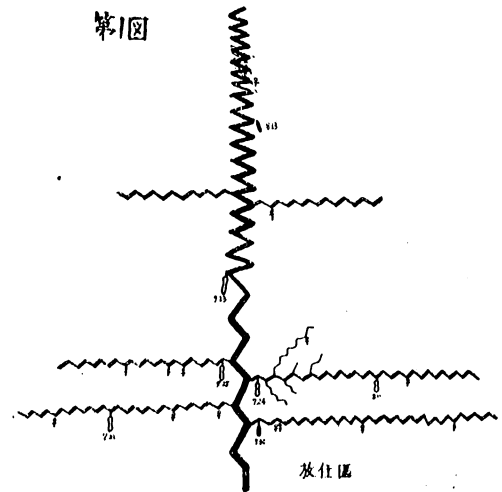
一面, 夏胡瓜の栽培期間は高温期で各種病害の発生も多く, 為に生育期間の短縮, 延いては収量の減少は避け難い, 故に追肥, 灌水, 藥撒布等により收穫期間を延長し収量増加を図る点を考慮に入れるならば, 従来の1回摘心より更に或程度の摘心を行うことが, 之等の作業, 管理を容易ならしめ, 且つ黄化脱落する多くの雌花の一部を結実せしめる可能性が考えられる.

又1株当りの占有面積の減少は, 栽培密度とも関連し, 更に有効な摘心法の確立が期せられるであろうと

【凡 例】



第1図

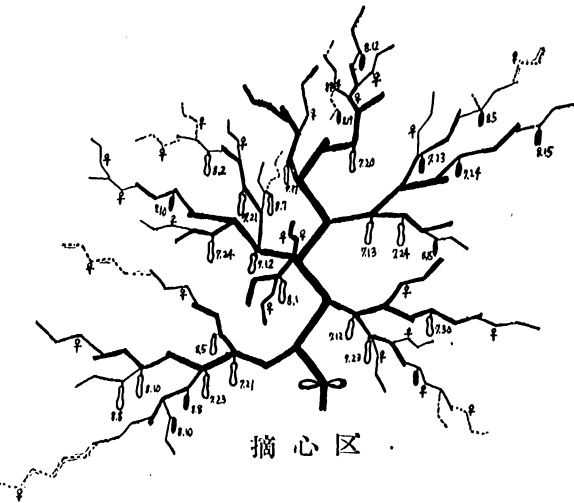


第 2 図



慣行区

第 3 図



摘心区

傾思考される。本試験は供試個体数少く、予備試験であり、種々不備の点もあると思われるので、この成績を以つて結論することは早計で、更に充分な検討を行う予定である。

5. 摘 要

這胡瓜宮陣を5尺×3尺に植え、放任区、慣行区、摘心区の3区を設け、雌花の着生節位別着生数、開花数及び收穫果数を調査した。その結果を要約すれば、

1. 雌花の着生数は、慣行区、摘心区、放任区の順で、放任区は大部分が1次側枝に、慣行区は2次側枝に、摘心区は3次側枝に多い傾向がある。
2. 開花数は着花数に対し30~62%で、40~70%の花は開花に至らず脱落する。
3. 結実数は、摘心区、慣行区、放任区の順で、その節位は、放任区、慣行区では雌花の着生部と同じ

向になつたが、摘心区は1次及び2次側枝に多い。

4. 時期別收穫果数は、放任区は全旬に亘り少く、慣行区は全旬に亘り收穫を見るが、摘心区は初期より中期に集中している。

5. 以上の点から、放任栽培は經濟栽培上合理的ではない。慣行法と摘心法では大差が認められ難かつたが他の栽培条件を考慮に入れ検討の要がある。